ヒトカケラ乃シズク

国見炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒトカケラ乃シズク

【Ｎコード】
Ｎ５５９４Ｍ

【作者名】
国見炯

【あらすじ】
冒険者ギルド所属、ディナーダ・ディアールの日常。それは冒険者らしく、クエストをこなす日々。※主人公最強話しです。

（前書き）

・連載で書こうと思っている主人公ディナーダ（♂）の試し書きの短編です。戦闘シーンは短く、下手です。

冒険者ギルド登録
活動拠点・月白の国【淡月亭】
冒険者ギルドランク　弐輪
ディナーダ・ディアール

「……」

手の平の上に収まる透明のカードを、専用の魔器具に通しながらディナーダは溜息を落とした。

クエストが終わった直後、魔法で冒険者ギルド運営ネットワークに接続してみたがエラー表示がされ、仕方なくギルドに顔を出してカードを通してみたが、結果はネットワークにアクセスした時とかわらない。エラーがでた後、窓口までお願いします――という文字が画面に表示されるだけ。

魔法師、召喚師、精霊師、睦果（ロッカ）師の場合はクエストが終わる度に支部に顔を出す必要はないのだ。ギルドが運営している魔道ネットワークは魔力さえあれば接続可能で、そこで大体の事は済んでしまう。はずだった。

「アイシャス…どうなってる？」

仕方なく、魔器具の隣にあるカウンターに腰をおろす女性に声をかけてみる。

「一体いつ話しかけてくれるのかと思ったわ。往生際の悪い男よねぇ」

「当たり前だろ。窓口って事は特殊クエストだろ？　大体複数…概ね癖のある連中と組まされて疲れるんだから、俺は何時も通り一人でこなしたいね」

ディナーダはパーティを組まず、一人で活動している。それはディナーダが魔法騎士である事が要因であり、組みたがるメンバーが

居る事も重々承知はしていたりするのだが、誰かと組むのは非常に面倒なのだ。
「大丈夫よ。貴方がフォローしなきゃ相手じゃないから」
「大丈夫じゃないだろ、それ。っつーか、大体フォローにまわされた事ないだろ？
　弐輪の魔法騎士を新人のお守なんかで使った事ないだろ。ここの支部はさ」
　こういう時は、面倒なクエストを押し付けられるパターンが定番化しており、ディナーダは暫く月白の国から離れるのもいいかもしれないと思い始める。
　さて、旅行でも行こうか。とアイシャスに背を向けようとしたが、後ろに感じた気配に力いっぱい嫌そうに眉間に皺を寄せ、重たい溜息をこれ見よがしに吐き出した。
「相変わらず失礼だな。ディーダは」
「省略するなよ。ディファレス」
　ディナーダの背後に立つのは、ディナーダと同じく淡月亭を活動拠点にしてるディファレス。睦果（ロッカ）剣士でランクは弐輪。レベル的にはディナーダと同じで、実力は贔屓目に見て五分五分といった所。
　最高ランクは壱。最低が睦。それは、何に関しても共通している数字。
「愛称って言え、愛称って。で、ディス、な」
「誰が言うか」
　そんな親しくない、と、ディファレスの顔を見ないままはっきりと言葉を吐き捨てる。
「珍しいわよね。ディナーダったら愛想は良いのに」
　面白そうに言葉を投げるアイシャスは完全に他人事所か、その表情は面白がっている。
　そう。ディナーダも他人事だったら、ここまでディファレスを避けなかっただろう。ディファレスとディナーダが共に行動すると、巻き添えで体力精神共にもっていかれるのだ。つまり、それが嫌で

嫌で関わり合いなんてしたくない。という確固たる意志をもって行動する必要がある。
　それが最低限身を護る事にも繋がるのだが、それを承知の上でディファレスは面白がってディナーダに干渉してくるから性質が悪いと言われるのだ。
　本人はそれさえも面白いらしいが。
「コイツの特異体質を承知の上での発言なんだよな？」
　冷たい視線を流してみれば、アイシャスは笑うだけ。
　ドイツもコイツも根性が曲がってる！
　俺は帰る！
　と、ドサクサに紛れて離脱を計るが、外套をディファレスに掴まれ首が絞まる手前で動きを止めた。
「離せ。フェロモンがうつる」
「酷いな。それに適応出来てしまうお前の体質が悪いんだろ？」
「適応出来ないからさばけないんだろ。ったく…心底残念な特異体質だよなぁ」
　外套を掴まれたまま残念そうな眼差しを向けてみるが、その時、アイシャスが笑いながら二人の肩を叩くと、
「それ、ディナーダもよね。ディファレスの残念な特異体質を借りれちゃうんだもの。残念な特異体質だけ、をね」
「……アイシャス。そう、それなんだよ。俺は残念になりたくないから近づきたくない。わかる？　わかったよな？　俺じゃなくて他の弐輪を誘って行ってこい。淡月亭は弐輪の登録が他の支部に比べて多くて助かるよなぁ」
　さて、やっぱり俺は旅行に。とディナーダが言い切るより前に、アイシャスの右手が凄まじい程の素早さで動いたかと思うと、ディナーダとディファレスの額に自分の右手の人差し指を軽くあてた。
「「あ・・・・」」
　２人の呆気にとられた声が重なるが、アイシャスは胸をはると、
「さぁ、行ってらっしゃい。２人からのアクセスに対してはこのク

エスト情報のみが表示されるようになっているから。ちなみに、これが終わるまでは何処の支部に行っても新規クエストは受けれないからね」
「ったく。相変わらず力任せに理不尽な決定権を持つよな。なんで受付なんかやってるんだよ」
肉眼では判断がつかないが、見るものが見ればわかるだろう。
額に籠められたアイシャスの魔力。それはこれから行うクエストの為の証明書であり、通行書代わりでもある。
このパターンは慣れたくはなかったが、慣れてしまったディナーダの行動は早かった。こうなったら、さっさと終わらせて通常クエストに戻るのが一番いい。
「一時間後に街の入り口に集合な」
ディファレスに告げると、ディナーダは右手を前へと突き出す。
「アクセス。召喚・転移プログラム発動」
目の前に平面のパネルが召喚されると、ディナーダは迷わず召喚プログラムを発動させる。パネル上には次々と文字が浮かんで消え、画面上には魔方陣だけが残された。そして、パネルに浮かんでいたはずの魔法陣が発光しパネルから浮かび上ると、地面へと落ちていく。
この動作は2・3秒程の時間で済み、ディナーダは呼び出した魔法陣の中へと足を踏み入れる。
最近、魔力を持つ存在が多用し始めた魔道。ギルドがそれを使って魔道ネットワークを運営し始めたのも、多用された要因の一つだろう。ギルド運営の魔道ネットワークに接続するだけなら、微量の魔力がある者でも利用出来るのだ。
パネルを呼び出し、後は接続すればいい。
ただ、それより先に進む場合はそれなりの魔力と知識が必要になってくる。
ディナーダの場合、態々魔法を唱えるのが面倒だという理由から、すでに何十種類という魔法や魔法陣の召喚プログラムを組み、鍵と

なる言葉を唱えるだけで発動する仕組みを確立させていた。
複雑な知識が必要になるのだが、プログラムを組んだ方が発動までの時間が短縮される。今の転移に関しても、呪文を唱える場合は数十秒の時間が必要になってしまうのだ。戦闘において、その差は大きい。

「あっさりしてるわよねぇ。しかも当たり前のように召喚プログラム組んじゃってるし。あれって、注ぐ魔力で魔法陣の大きさまで調節してるんでしょ？」
「あぁ。魔法騎士を名乗っておきながら召喚師と同等の事をやってのける。だからこういう厄介なクエストに借り出されるって自覚は生まれないみたいだけどな」
「生まれなくていいわよ。だって、用心されたら頼めなくなっちゃうもの。ディナーダは逃げそうだし」
「…面白がってるな。さて、と…俺も行こう。準備するものが多そうだ」
「いってらっしゃーい」
「あぁ」
カウンターからアイシャスののんびりとした声が響くが、それには片手を上げて応えておく。
ディファレスの残念な特異体質はさておき、ディナーダと組ませたという事は、ギルドでも相当手を焼いているクエストだという事。流石に、経験上それを解ってしまうディファレスは、迷わず最高級品を取り扱っている魔道具屋へと足を運ぶのだった。

転送で自室へと戻ったディナーダは、今まで身につけていたものを全て脱ぎ、高い防御力を誇る特殊な製法で作られた衣服を身につけていく。
剣に関しては普段使っている物の柄に細工を施し、ベルトへと差した。

「なーに持ってくかなぁ。ディファレスも良いもので統一してくるだろうけど…」
宙に次元式保管庫の入り口を呼び出すと、そこに荷物をいれていく。ここにいれたものは、ディナーダの左腕に付けている腕輪によって取り出す事が出来、念じるだけで済むから一人の時は重宝していた。
ただ、特殊能力でもある為、知らない人間の前では使わないようにしている。が、ディファレスの場合は今更だろう。既に何度目かのクエストの時に使い、ばれてしまっているが緊急事態だった為、後悔はしていない。
「魔法師とかじゃなくて、剣士か。肉体労働なんだろうなぁ」
相変わらず。だろう。
魔法も剣も使えて、どちらも並以上。そうでなければ、特殊クエストは受けれない。
今回の場合も受けたくは無かったが、権力を行使された以上断る事は出来ないし、最終的に受けてはいた。アイシャスのお願いには弱いし、ディファレスの事も嫌いではないのだ。特異体質が嫌なだけで。
「一応ディファレスの分も持ってくかー」
とある伝手で購入した、外套。一見普通の外套に見えるように繕われているが、実際は違う。弐輪のディナーダでさえこれの購入するまで、一ヶ月ほどかかったのだ。弐輪が受ける高レベルクエストの報酬ですら一ヶ月。あえて金額は口にせず、ディナーダは次元式保管庫へと放り込んでおく。
「行く前に手紙を書いてっと…これは手紙じゃないよなぁ。物品依頼書か」
伝手に渡す手紙を使い魔へと渡し、転移魔法陣で街の入り口まで移動する。
待ち合わせ場所には、既にディファレスの姿があったが、周りに人はいない。その事にホッと胸を撫で下ろしながら、ディナーダは

ディファレスに声をかけた。
「あからさまにホッとするな。俺も制御石は付けてる」
「もっと上等なモノを付けてくれ。そしたらあからさまな態度はやめるから」
ディファレスが見せた制御石付きの腕輪に、首を横へと振る。十分良いものだったが、ディファレスの特異体質を抑えきれるものではない。
「随分マシになったんだがな」
「マシにはな。始めは酷かったからなぁ……思い出したくないなぁ」
出会いは最悪だった。
それさえなければ、ここまで顔を合わせるのを嫌がったりはしなかっただろう。
「お前さぁ、それ使って。情報得てるだろ？　人物の特定はされてないけど噂にはなってるから、気をつけとけよ」
だけど、知り合いなので一応の忠告。ある意味諜報活動には便利な特異体質。使わない手はないが、使いすぎれば誤解もされる。
「好きな女が出来れば使わない」
「あっ、そう。さっさと作れ」
「理想が高いとよく言われる」
「そんなもん知るか」
呆れ９割で言葉を吐き捨てると、ディファレスとの会話を止めてパネルを召喚する。ここから情報を引き出さないと、クエスト内容が一切解らない。ギルドでアイシャスが内容を口にしなかったという事は、本当に限定された内容なのだろう。
「どうだ？」
「ちょっと待ってな。魔力の認証が入ってる。どれだけ機密なんだか」
「あそこの管理は、機密だかオープンだかわからないがな」
ディファレスの言葉に、まったくだと頷いた。

機密なら、カウンターに越させる事自体間違っている。逆に目立つし、会話も聞こえたい放題でまったく機密扱いにはっていない。
「……シンプルだな」
「あぁ。立ち入り禁止区域に入って奥まで進めばいいだけか」
その為の許可証。額に浮かぶ印によって、普段なら足を踏み入る事の出来ない禁止区域に入る事が出来る。

「この続きは入ってから、だな」
区域に入ってしまえば、外からは魔法も届かない。会話を盗聴される事もなく、ここで話す必要はないとばかりに、再びディナーダは転送陣を召喚した。
ここからは片道1日程度。転送陣を使えば一瞬で済む。
「よく魔力がもつな」
そこは関心するとディファレスが言うと、
「企業秘密」
と、ディナーダは素っ気無く答えると、パネルから転送陣を足元へと転移さえ、足を動かす時間さえも短縮させて発動した。
残されたのは、何かの気配が幾つか。
立ち入り禁止区域の方を見つめ、何かが音をたてていた。

クエストの内容はシンプルだった。
立ち入り禁止区域の奥の泉から、水を持ち帰る。ただ、それだけ。
その水は死の床にある者さえも健康な状態まで回復させるという奇跡の水。
奥にたどり着くのは最短で一週間。それも、人を喰らう存在に会わなければの話し。
それは物狂(キヤウ)と呼ばれ、この星に住む存在の敵として認識されている。
「物狂(キヤウ)のレベルは……ここの最高は、参レベルか」
「そうみたいだな。観測した結果みたいだけどな。けど、あいつ等

の行動パターンはよくわからないんだよなぁ。下位は兎も角、上位の情報は少ないし」
観測レベルが壱や弐を相手になると、観測する方も命がけになる。ディナーダやディファレスでさえ、レベル弐の物狂(キャウ)を相手にするのは命がけになる。参辺りだったら、油断しなければ無傷で勝てるだろうという程度。
ここの観測レベルは参。だが、それを頭から信じる程経験を積んでないわけではない。
「ディファレス。これつけといて」
次元式保管庫から外套を取り出し、ディファレスへと投げる。
「これ…いいのか？」
一目でこれの価値を見抜いたディファレスに舌を巻くが、それは出さずに頷いた。
「予想外の事態が起こっても、これなら多少はもつだろ」

備えあれば憂いなし。
その言葉通り、2人の装備は通常クエスト時とは違い、下位レベルの物狂(キャウ)なら近づく事さえ出来ない装備で固めていた。
それでも、レベル参の物狂(キャウ)に対しての効果は、下位程ではない事も知っている。

3日程経った頃、ディナーダは大きな樹の下で精神を集中させていた。
徐に、色とりどりの魔法石を散りばめた腕輪をつけた両腕を胸の前へと持っていくと、腕輪同士を擦り合わせ音をたてさせる。
シャラン、と澄んだ音が響き渡るが、周りからは何の反応も返ってこない。
「反応はないみたいだな」
ディナーダのたてた音に注意深く周りを観察するが、何かが動く気配はなかった。

「あぁ。寝床はここの木の上だな」
物狂(キヤウ)が好む音を広範囲でたててみたのだが、振動の響く範囲で物狂(ヤウ)の存在は確認できなかった。それはそれで良かったのだが、歩き始めて二日。一切物狂(キヤウ)を確認出来ないのも逆に不安を掻き立てると、好む音を態と広範囲に響かせたのだ。
装備だけの問題じゃなさそうだと、言葉にはしなくても2人して確信はしているのだが、やはりそれを口にだして相手に確認する事はしなかった。
太い枝の上に野宿魔器具をセットし、結界付きのテントを張る。一人用だが、多少の太さがある枝の上ならバランスを保つように出来ているので、落ちる心配はなく眠れる冒険者が好む魔器具の一つ。
その一つ上の枝にディファレスもテントを張ると、携帯食料を取り出しそれをディナーダへと投げる。
「たまには付き合え」
栄養は満点。でも素っ気無い携帯食料を受け取り、それを口の中へと放り込む。腹持ちは良いのだが、やはり好んで食べないものじゃないな、なんて思いながら口へと運ぶ。
「後1日。このまま会わずに行くと思うか？」
ディファレスの確認に、ディナーダは受け取った携帯食料を咀嚼し終わった後、泉のある方を指差す。
「水を入手したら、裏技使って転移陣でいっきに淡月亭へ戻る。結界の外にはお客が来てそうだから、馬鹿正直に結界の直ぐ外には行かないけれど……参の物狂(キヤウ)を一切見ないのは不自然だな」

ここまでは驚くほどスムーズに進んだ。
逆を言えば、何も会わずに進みすぎたのだ。
普通だったら何も会わずに最短で一週間はかかる道のりを、2人は3日で殆どの距離を進んでいた。後1日あれば奥に到達出来るだろう。だが、これだけの距離を進んでも物狂(キヤウ)の痕跡はあっても姿は見ない。

会う確率が高すぎる場所故に、立ち入り禁止区域に認定された場所で、外よりも会う確率が少ない事態に、ディナーダとディファレスは頭を悩ましていた。
何かがあるが、その何かがわからない。
「ディーダ。感知はどれ程の範囲だ？」
ディファレスの言葉に、ディナーダはフッと視線を逸らすと、
「戦闘不能になっていいなら、結界の外まで…か。そこまでの広範囲は、数秒しかもたないけどな」
おそらく同じ事を考えているであろうディファレスに、ディナーダは言葉を続ける。
「帰りの転移の分を考えると、半径５０ｋｍ…が、半日。それなら魔法は行使出来る」
「精度はどれぐらいだ？」
「レベル参辺りならモレはなく。壱を推定するとして、モレを無くす場合は半径５ｋｍが限度だな」
「５ｋｍ…か。壱相手には少し厳しいな」
「あぁ。５ｋｍ程度なら一瞬で詰められる可能性が高い」
レベル壱は未知数であり、脅威以外の何者でもない。
遭遇しても生き残る確率が低すぎて、情報さえ満足に集まらない状態。
それでも、必死でかき集めた情報として、レベル壱の中には転移に優れた存在がいて、５ｋｍ程なら一瞬でつめれるという事。殺傷能力も高く、魔法師が残した眼によって漸く得られた情報だった。
先ほどから脳裏を過ぎる最悪の事態だったが、そこで２人同時に肩の力を抜いた。
「まぁ…ここでウダウダ考えていても仕方ない。寝るか」
始めにディナーダがテントの中へと引っ込めると、頷いたディファレスも、ディナーダのテントを見上げた後に自分もテントの中へと戻っていった。
テントの中は、個人仕様になっている。自分の好みに改造する事

が出来て、こういうクエストでは寝れる、という以外にも幾つかの利点がある。
その利点を活かし、ディファレスは備え付けてあった丸い水晶らしきモノのくぼみに、帯に差していた剣の刃を押し込めた。柄を残した状態で水晶らしきモノに呑み込まれた剣。そこに、懐から取り出した包みを開け、色とりどりの粉を降りかけた。
「強化がどれ程効果があるか…予想はつかないか。ディーダとの連携も視野にいれて・・・・アイツの特殊能力に期待はしたいが…」
なるべくなら使わせたくない、と。
そんな事を思った自分に、ディファレスは苦笑いを浮かべるだけだった。

声が聞こえる。
音無き音。
脳に直接響く声。

「（精霊か……久しぶりだな。どうした？）」
半覚醒のまま、音には出さずに口を動かす。
ディナーダとは対照的に、声を届けた精霊たちは焦っていた。
普段はここは精霊たちの領域。だったが、稀に、精霊すら宿主に篭る時がある。
物狂（キャウ）の徘徊。

レベルが高い程意志を持ち、星に住む一族に姿形が似てくる物狂（キャウ）だが、ここにいるモノはそれとは何かが違っていた。
根本的に、違うのだ。
干渉してきた精霊たちにその映像を見せられ、ディナーダは苦笑

しながらも脳を完全に覚醒させた。その途端、眼に飛び込んでくるのは小さな精霊たちの姿。
「レベル零――か。最強のレベルなのに、決して物狂（キャウ）の到達点にはたどり着けない存在。ある意味、本来の物狂（キャウ）…だな。ありがとう。準備するよ」
帯に鞘を差すと、ディナーダは剣の柄に埋め込んである宝石に右手の人差し指と中指を当て、魔力を注ぎ込む。
「ディファレスー。起きろー」
テントを球体へと戻すと同時にディファレスに声をかけ、そのまま呪文の詠唱へと入る。
「距離は？」
既に準備をしていたディファレスは、テントを戻すと、その身に炎を纏わせ気配を伺う。
「アクセス・防御壁発動」
ディファレスの問いに答える間もなく、パネルを展開させ防御壁を発動させる。瞬間、何かがそれに弾かれた。
「パネル展開・双壁」
パネルを同時に召喚し、防壁を強化させる。その合間をぬうように、ディファレスが身体に纏っていた炎を引き抜いた剣先へと移し、刀身を銀から朱へと変化させた。
ディナーダの防壁に阻まれ弾かれた何かは、少し離れた場所にベチャと音をたて地面へと落ちた。
距離が生まれた事により、互いが相手を観察する余裕が出来たが、異様な姿に無意識に眉根をつり上げる。
アメーバ状の物狂（キャウ）。所々に黒光りする苔のようなものが生え、落書きしたかのような赤い色の眼が所狭しと瞬きしている。背中にぞわ、としたものが駆け抜けそうになるが、ディファレスは刃を一閃させ、炎と共に物狂（キャウ）へと衝撃波を食らわし、入れ替わるようにディナーダが唱えていた風の呪文を放つ。

炎と物狂（キャウ）の周りを風の壁で囲うと、次の詠唱へと入ろうとするが、風の壁から飛んできた物体を反射的に枝に飛び移ってかわす。
ネットリとしたモノが枝を溶かし、重力に逆らうことなく落下させるが、その後が問題だった。物狂（キャウ）の身体の一部が触れたであろう場所が朽ち始めた。横目で確認するが、表面上は溶けたという感じだが、実際は腐敗したのだろう。
「多少は…か」
それなりの火炎を刃に纏わせていたのだが、物狂（キャウ）の表面を微かばかり溶かしただけだった。
だが、少しは効果があったのか、苛立ったように身体の所々から棘のようなものが突き出し、攻撃の意志を見せたかと思うと、物狂（キャウ）の姿が掻き消えた。

「――ッ」

ディファレスの頭上へと転移すると、身体を広げディファレスを呑み込む。

「ディファレスッ！」

当初の三倍程に膨れ上がった身体は、ディファレスが取り込まれ、まだ消化されていない証拠だったが、いつ防壁が破られるかわからない。
破られたら最後、一瞬で骨も残さず溶けるだろう。かといって、中にディファレスがいる状態では攻撃を仕掛ける事も出来ず、相手はそれが解っているかのようにディナーダに狙いを付けて動き始める。
幾分重くなった身体を転がすようい、生命を刈り取りながらディナーダとの距離を詰めていく。

時間は無い。

それは、確実。

近付いてくる物狂（キャウ）を見ながら、ディナーダは観念したかのように瞳を閉じる。

勿論、諦めたわけじゃない。

「開眼――」

再び眼を開けた時、ディナーダは本来の色を取り戻していた。

「アクセス――対象物指定・拘束」

詩でも紡ぐように、ゆっくりと言葉を紡いでいく。

「追加・転移」

対象物指定の限定呪文に、更に転移も付け加えディファレスを救出すると身につけていた外套を宙へと放り投げた。
外套が落ちた先には、転移されたディファレスの姿。突然降ってきた布を避ける事が出来ず、ディファレスが状況を確認するより先に視界が白に包まれる。

「展開・次元式断罪の刃」

ディファレスが外套を払う一刹那、断罪の刃が物狂(キャウ)の中枢を消失させ、ディナーダは再び色を纏う。

「（剣を二重構造にしてた意味がないなぁ…）」

これを使わなくてもいいように、刃が折れると同時召喚されるように剣を細工しておいたのだが、結局鞘から抜く事なく終わらせてしまった事に憂鬱になる。が、後回しにしてディファレスに駆け寄り状態を確認する。防壁が破られていたら、回復ではなく蘇生が必要になってしまう。

「大丈夫だ…防壁は破られてないし、外套も無事だ。ただ視覚がな」

眼が霞むのか、細めてはいるが重症という程ではなく、ホッと胸を撫で下ろすと同時に気付く。

左手に浮かぶ上る、手袋越しでもわかる紋章と集結された魔力の渦。

「（俺が助けなくても…この分だと内側から燃やし尽くしたな）」

ほぼ無傷で生還しただろう。ディファレスの底知れぬ魔力に感心しながらも、常人ならば間違いなく思うであろう怖いという感情は沸き起こらなかった。

「ディーダ」

「ん？」

「どうやって助けて、斃したかは聞かない。それでいいな？」

問い、ではなく確認。

「あぁ。ありがとな」

ディファレスの気遣いに、笑みがこぼれた。

聞かれた所で、答えなかったけれど。

聞かないでいてくれるなら、嬉しい。

その後は何事もなく無事水を入手し、アイシャスへと手渡した。
が、ディファレスの近くにいたディナーダは結局匂いが移り、暫く
完全防備という名の自室に閉じこもる事を余儀なくされたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5594m/

ヒトカケラ乃シズク

2010年10月8日14時19分発行